
『自由の中で銃構えて十数えたら』

四季 ワタリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『自由の中で銃構えて十数えたら』

【Nコード】

N3616F

【作者名】

四季 ワタリ

【あらすじ】

詩のような、エッセイのような、小さな物語のような、そんな散文たちの集合体。表題は好きな歌詞の一部より。貴方だったら、この表題の言葉を聞いてどんな情景を思い浮かべるのでしょうか？

『消滅』

『消滅』

なぜ父親は俯いているのだろうか……

私には分からない

なぜ弟が祖母に抱き付いているのだろうか……

私には分からない

なぜ叔母が鼻を^{すす}吸っているのだろうか……

私には分からない

なぜ私の家族は皆で泣いているのだろうか……

私には分からない

なぜそれが私には理解できないのだろうか……

私には分からない

泣く理由なんて何もないはずだ

だってそうでしょ？

母はこの世界から救出された

醜くて、汚らしい、絶望に満たされた世界から……

そして天国にいった

悩みも、悲しみも、苦痛も何もない天国へ……

だって母は誠実な人だったし

なにより慈愛に満ちた人だったし

全ての人から好かれていた

だから天国にいくのは当然の報い

それは母にとっても、私たち家族にとっても、悲しみではなく祝福となるはずだ

母に会えないことが悲しいの？

ただ肉体が減びただけなのに？

いままでたくさんの思い出を作り、それらを私たちは記憶している
というのに？

母と同じように私たちが善良であるならば、また再会できるとい
うのに？

私には分からない

私には分からない

だから私は……

母の棺の前で慟哭^{どうく}する

『消滅』（後書き）

これから後書きではその詩を書くにあたり、自分が何を思っていたり考えたりしていたのかを短めに記していきます。興味のある方は作品と一緒に見てください。

『消滅』について

どんなに喜ばしい報いがあっても、どんなにその死が正当なものだとしても、私たちは“死”というものに直面した時、それを受け入れることをためらう。そして、それが何故なのかを全て理解することはとても難しい……。

『納豆と妹（のぞみ）』

『納豆と妹』のぞみ

僕は納豆が大嫌いだ

なぜかって？

そんなの簡単だ

あの気味の悪い粘り気

そして食べ物とは思えない匂い

まさに最凶のタッグ

実際に食べたことはないけど……

食べずとも僕には分かっている

絶対にマズくて食べられるものではない

そつにきまっているんだから！

大人たちはのぞみが大嫌いだ

のぞみを一度も見たことないのに嫌いだった

なぜかって？

そんなの簡単だ

父と母が離婚した後にお腹の中に居ることがわかった子供だし

すでにその時、母一人で僕たち三人の子供を養っていたし

なにより早い段階で障害があることがわかった

生まれてきても不幸になる運命……

だから祖父は母に言った

「墮ろしなさい」と……

そして祖母も母に言った

「墮ろしなさい」って……

叔父や叔母も母に言った

「墮ろしなさい」

母は泣いた

あんなに強かった母が……

涙を流していた

でも母は言った

『私は産みます』って……

大人たちはそんな母を蔑むような目で見た

僕はなんだか悲しかった

妹は納豆が大嫌いだ^{のぞみ}

なぜかって？

そんなの……かつての僕と同じだ

「ネバネバしてて臭いよう」

遠目で納豆を睨み付ける妹^{のぞみ}

一度も食べたことがなくせに……

いつの間にか僕は笑っていた

目の前に居るのは確かに僕の妹

愛しくて愛しくてたまらない僕の妹

「よし、だったらお兄ちゃんが一口食べてみるから、のぞみも真似してみるんだよ?」

そういつて僕は納豆を口に運んだ

怪訝そうに僕を見るのぞみの瞳

「お兄ちゃん……おいしーの?」

「うん、おいしいよ。のぞみも食べてっらん」

妹はその日から納豆が大好きになった

『納豆と妹（のぞみ）』（後書き）

『納豆と妹^{のぞみ}』について

子供と大人。問題の本質についていえば、両者に大差はない。違ってくるのは、大人になるほど現実を避けるのが上手くなる。ただそれだけのこと……。

『愚問の断片』

『愚問の断片』

「私はどこにいるの？」

「存在の証明なんて……」

「見えるのに私にはミエナイ」

「居なくなれば何かが変わる？」

「代わりの人間なんてたくさん居る」

「消えることは呪い？ それとも祝福？」

駆け巡る言葉

無駄な時間の浪費

答えのない問題

永久に続く螺旋

メビウスの輪の上で踊る

私とワタシ

「何かを失った……ような気がする」

「始まればいつか終わる」

「何のためにこの世にいる？」

「この先、どこへ行くの？」

「何も知らない、知ろうとしていなかった」

「忘れられるくらいなら、消えたほうが……」

断片たちの再構築

無益な命の消費

必要のない答え

際限の無い思考宇宙

クラインの壺の中で遊ぶ

ワタシと私……

『愚問の断片』（後書き）

『愚問の断片』について

私個人としては、無駄なことを考えている時ほど楽しい時間はない。反対に、楽しいと思えるからこそ、その時間は無駄ではない。

『死骸雪（マリンスノー）』

『マリンスノー
死骸雪』

かつては輝いていたのに

彼らは墜ちてゆく

過去の繁栄は忘れ去られ

彼らは消えてゆく

自分が何だったかと思い出せずに

彼らはただ雪になる

いまは遠いあの日

彼は海の底は暗いと言っていた

光が全く届かないから暗いのだと…

何故彼はそのことを知っていたのだろうか？

私たちはそんなところに行けないのに…

そんな暗い世界なんて

私たちには似つかわしくないのに…

私たちは生きていて輝いているのだから

僕が存在を彼らは知らない

僕の世界を彼らは知らない

僕の思いを彼らは知らない

そしてなにより彼らは

自分がどんな状態でも輝けることを知らない

そんな暗い暗い水底で

僕は今日も彼らの最後の輝き

マリンスノー
死骸雪を見る

『死骸雪（マリンスノー）』（後書き）

『^{マリンスノー}死骸雪』について

実際のマリンスノーはプランクトンの死骸などで出来てるそうです。その実物と名前を聞いた時に抱かせる印象とのギャップが面白いですね。

『未来世界』

『未来世界』

僕にも変わっていくことを恐れない時代があった

むしろ毎日何かが変わっていったってほしいと願っている時代があった

例えばボクが住んでいた雨漏りのするボロいアパートだったり

食器棚の一番上にすら手が届かない自分の小さな体だったり

両親や姉からよく馬鹿にされる子供っぽい自分の性格だったり

時の経過が全てのモノを解決していくと信じていた

『「あの頃の僕は……」』

この世界に変わらないモノなんて存在しない

全てのモノはその意志に関わらず変わっていかねければ存在しえない

人間も建物も風景も思い出も……

「それは最初ボクにとって希望だった」

『でもいつしかそれは僕にとって呪いになった』

かつて住んでいた家は取り壊され巨大なビルが立った

かつて小さかった自分の体はいつの間にか成長しなくなっていた

かつて多くの時間を共に楽しく過ごした両親と姉は今何をしているのだろうか？

『でも僕はそのことを悲観しているわけではないんだ』

「じゃあなんでボクという存在を僕の中で生かし続けてきたの？」

『さあ、何故だろう……僕にもはっきりした理由はわからないんだ……でもおそらくは』

遠い昔の日

何も無いような気がしてた世界

でも全てのモノが備わっていた世界で僕はボクに言う

『大人になって涙を流せなくなった僕の代わりに、ボクに泣いてほしいから、だと思っ……』

全てのモノが変化し確定した現実を受け入れることしかできなくな
った僕

そんな僕の代わりに

ボクは未来世界で涙を流す

『未来世界』（後書き）

『未来世界』について

先に進むためには痛みを伴い何かを犠牲にして変わっていかねければならない。でも気がつけばその痛みと犠牲に慣れてしまっている自分がいて、ちょっと悲しくなった……。

『私という通過点』

『私という通過点』

線路は続くよどこまでも

山越え谷越え海越えて

電車はドンドン進んでいくよ

いつの間にか電車に乗ってた私と母

ガタンゴトンと優しく揺られ

二人はどこへ向かっているの？

夕日に照らされた母の横顔

なんかちよつと疲れてるみたい

だから私は悲しくなるの

線路は続くよどこまでも

町越え村越え橋渡り

電車はまっすぐ進んでいくよ

いつの間にか到着した駅で

めっきり弱った母は静かに告げた

『私はここで降りなきゃいけない』と

私が嫌だと答えると

母親は電車の中に目を向け

穏やかに言っの

『今のあなたには守るべき者がいるでしょ？』と

母と別れて娘を連れて

私は先へと進み出す

いつかは私も降りなきゃならない

そんなことを考えながら

線路は続くよどこまでも

絶えず誰かを乗せながら

電車はどこへと向かっているの？

『私という通過点』（後書き）

『私という通過点』について

自分とはわずかに異なる個体を産み出し、未来へと種を残し前進していく人類たち。その先に終着駅なるモノがあるのでしょいか？

『何処へ行くのあの日』

『何処へ行くのあの日』

無限に続くと

信じてたあの日

終わりという意味を

まだ知らなかったあの日

時の流れに身を任せ

優しい約束に縛られ

囲われた自由の中で

一生懸命に戯れ合い

精一杯毎日を感じてた

幸せに包まれながら

誰にも邪魔されず

僕らは僕らのままで

無邪気に振る舞えたのに

嗚呼だけど

いつからか気づいてた

僕らは大切な宝物を投げ捨て

陳腐なガラクタを拾い集めながら

少しずつ汚れていくことに

加速しだした現実
は
泡沫の夢を叩き潰し
容赦なく僕らを蝕み
全てを溶解しながら
何もかも飲み込んでいく

失いたくないあの日を
小さな胸で必死に抱きしめ
時間を止めてと
神様に強く願った
聞き届けられないと
分かっているながら

その時になつて
初めて思い知らされる
自分たちの幼さを
自分たちの儚さを
自分たちの愚かさを

あの日無くした僕らは
圧制的で絶対不可侵な
世界の理に組み込まれ
きつと立派な大人に
成り下がっていくのだろう

でもその悲しみも
長くは続かないはず
きっと

10年後

20年後

30年後

僕らはその時の気持ちを
思い出すことすらできずに
みんな『あの日』としか
呼べなくなるから

『何処へ行くのあの日』（後書き）

『何処へ行くのあの日』について

写真や映像で時を保存するように、気持ちを完全に保存できるモノがあつたらいいなあ、と思う今日この頃……

『空に夢が浮いてた瞬間』

『空に夢が浮いてた瞬間』

一分間太陽を直視してやろうと思い

目が痛くなったこと

月が丸くなったり

少しずつ欠けたりして

姿を変えていくこと

くじらやソフトクリームやサンタクロースのヒゲ

そんな形をした雲を見つけたこと

七色のハズなのに

四色にしか見えなかった虹に

ちよつとがっかりしたこと

飛行機の後続く飛行機雲

それが消える瞬間を

ずっと待っていたこと

ふかふかの雲の上で寝転がって

ゴロゴロしたいと思ったこと

毎日空を見上げるだけで

何か新しいものを見つけられた

でもいつからだろう

空にはなにもないと気づいて

見上げることすら面倒になり

地の上でしか

夢を見つけられなく

なってしまったのは

『空に夢が浮いてた瞬間』（後書き）

『空に夢が浮いてた瞬間』について

成長と共に好奇心の幅が狭くなり限定されてきたように感じる時があります。良くも悪くも現実的になってきた、ってことなのかな？

『まるで妖精を探すように』

『まるで妖精を探すように』

ゴミ箱を漁り続ければ

いつかは真珠が見つかるの？

青空を注意深く観察すれば

いつかは金魚が見つかるの？

地球の外に出たならば

いつかは家族が見つかるの？

そんなわけないと

人は知っている

でも何故だろうね

理性的で

合理的で

現実的な

そんな彼らのハズなのに

いつまでも探し続けている

いつまでも夢に見続ける

黒く澱んだこの世界のどこかに

自分の存在が許される理由が

自分の存在が許される意味が

自分の存在が許される目的が

必ずあると信じて

『まるで妖精を探すように』(後書き)

『まるで妖精を探すように』について

明確な存在の理由や意味、目的がそこまで重要で必要なんだろうか？

そんなものが私たち一人一人にあったとしたら、工場なんかで動いている作業用ロボットなんかと大差がないような気もするけど……

『自由の中で銃構えて十数えたら』

『自由の中で銃構えて十数えたら』

生まれると同時に

静かに動き始めた

命の砂時計

神は私たちの誕生を祝福し

各々に唯一無二の

色で満ちた世界を与えた

青い水は分け隔てなく

全てのものに愛情を注ぎ出し

白い風は軽やかに駆け出しながら

優しい口づけをする

碧い草は温かい眼差しで

儚い想いを包み込み

紅い炎は穏やかに佇みながら

力強く皆を支える

故に私たちは叫ばずにはいられない

嗚呼

この世界は何故こんなにも美しいのだろう!!

嗚呼

この世界に生まれたのはまさに無上の喜びだ!!と

僕はそんな夢を見たかったなあ……

いつまでも止む気配の無い
強かな黒い雨に打たれ
奥底に締まってた始まりの炎は
もう僅かに揺れ動いてるだけ

過ぎてゆく時間に蹂躪され
無数にできた傷口を舐め
痛みに苦しめられながら
生かされてきた日々

記憶の奥深くに眠る
華やかな樂園での生活
呼び覚ました僕の目に浮かぶ
色付けを忘れた涙は
己がために流れるの？

立ち止まる理由を無くした
だから僕は歩いていこう
自由が全て奪われる前に
当然の報いを受け取るために

手のひらに舞い降りた
微笑むことのない
無機質な黒き天使よ

十の災いが通り過ぎた後に
安らかな眠りを
僕に与えたまえ

その見返りとして
僕は世界に色を与えよう
水や風や草や炎では
生み出すことのできない
原初の神聖な輝きを

ああ、見てご覧、赤

『自由の中で銃構えて十数えたら』（後書き）

『自由の中で銃構えて十数えたら』について

これがこの作品の最後の詩になるのですが、何か特別な意味はありません（苦笑）

この表題はS O U L・d O U Tのs i c kという曲で使われているのですが、初めてこの言葉を聞いた時に思い浮かんだ情景（私は拳銃自殺を想像した）をそのまま書いてみました。

最後まで読んでくださったことに感謝いたします。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3616f/>

『自由の中で銃構えて十数えたら』

2010年10月10日06時08分発行